

現代語訳「岩倉具視特命全権大使 米欧回覧実記第1巻アメリカ編」

慶應義塾大学出版会 2008年6月20日刊を読む

愛国心(自らの生国を愛する心)とは

1. 五大洲の中に大小の国があり、それぞれの風俗のもとに暮らしているのだが、自主独立を遂げれば、それぞれ自らの生国を愛する心が鬱勃として湧き起こるのは、ちょうど自分自身を愛し、自分の家を愛するのと同然である。

(1) アフリカの人々は炎熱の地に住みながら、そこが世界一の樂園だと考えているであろう。

(2) ロシアの北の境に住んでいるものは橇そりに乗って氷上を走って都にやって来るが、氷が解けそうになると橇をまた走らせて北に帰ってしまう。

2. それぞれの土地に住むものはそれぞれの土地を愛している。

(1) それは草木が根を大地に下ろしているのと同じことである。

(2) 愛国心は人情の自然として生まれるものであって、これが忠誠心の根元なのである。

3. 欧米の人々が文明開化を論ずる場合、まず愛国心のことから論じ出す。自分自身を大切にせず、

(1) 生まれた家を捨て、故郷を顧みず、自分の国を嫌う者は、わが国の伝統的な教えからも背いているのだが、西洋の文明からも評価されないところである。

(2) 欧米の教育においてはまずその国の歴史を教える。

(3) それが愛国心を育てるものだからである。

P327

[コメント]

明治4年から1年9か月かけ欧米を訪れた100名を超す大視察団、岩倉視察団の世界旅行記である本書は、よくもここまでと思われる位立派な報告書で、日本の近代化に与えた影響は図り知れない。

- 2009年2月16日林明夫記 -